（12 月 30 日）「出エジプト記 40：26～33」
この幕屋、つまり臨在の幕屋の入り口に焼き尽くす献げ物の祭壇を設け、焼き尽くす献げ物と穀物の献げ物をその上でささげた。主がモーセに命じられたとおりであった。
（出エジプト記 40 章 29 節）

・いよいよ幕屋の運用開始です。会見の幕屋の垂れ幕の前に置いた金の祭壇の上でかぐわしい香をたき、会見の幕屋の入り口では焼き尽くすいけにえと穀物の供え物を献げます。すべて主がモーセに命じたとおりです。
・わたしが司祭になって初めて聖餐式を司式したとき、とても緊張したのを思い出します。「言葉を言い間違えてしまったらどうしよう」、「十字を切るなどの所作はどうしたらよかったっけ？」、いろんな不安が渦巻いていました。
・しかし礼拝は、「喜びのとき」であることを忘れなければ、大丈夫です。聖書朗読もオルターも、たとえ間違えたとしても許されます。ただ旧約の時代は、そうはいかなかったかもしれません。アロンはとても緊張したでしょう。

（12 月 31 日）「出エジプト記 40：34～38」
雲が幕屋を離れて昇ると、イスラエルの人々は出発した。旅路にあるときはいつもそうした。
（出エジプト記 40 章 36 節）

・ついに 2023 年の聖書通読が終わります。何気なく始めた創世記と出エジプト記でしたが、とっつきにくいところも多くあり、なかなか大変でした。みなさんはいかがだったでしょうか。
・出エジプト記の最後は、イスラエルの人々がこれ以降も旅を続けるという記述で終わります。雲が神さまの栄光のしるしとなって、イスラエルの人々を導きました。彼らはその雲によって、神さまが共に歩んでくださることを知るのです。
・わたしたちの信仰の旅も、まだまだ続きます。目に見えるしるしはなかなか与えられませんが、神さま（イエス様）がいつも共にいてくださることを信じ、新しい一年も歩んでいきましょう。神さまの祝福が、豊かにありますように！

2023 年 12 月

創世記・出エジプト記　　通　読

12 月

（12 月　1 日）「出エジプト記 33：17～23」
また言われた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」
（出エジプト記 33 章 20 節）

・モーセは、神さまが共に歩んでくださるしるしを示して欲しいと願います。しかし神さまは不思議なことを言います。「しるしは見せよう。だがわたしを見ると死んでしまうため、しるしが通りすぎるまで、わたしはあなたを手で覆い、見えなくする」。
・この言葉通りであれば、結局しるしを見ることはできないということになります。11 節では「顔と顔を合わせてモーセに語られた」とありましたが、実際には姿は見せていなかったのでしょうか。
・ただキリスト教では、「見ないのに信じる者は幸いである」という言葉がイエス様の口から語られます。しるしを見たからではなく、心で感じ、信じることのできる信仰を、わたしたちも求めていきたいものです。

（12 月　2 日）「出エジプト記 34：1～7」

モーセは前と同じ石の板を二枚切り、朝早く起きて、主が命じられたとおりシナイ山に登った。手には二枚の石の板を携えていた。

（出エジプト記 34 章 4 節）

・31 章 18 節で神さまは、モーセに 2 枚の石の板（掟の板）を授けました。しかしその板は、金の子牛事件を見て怒ったモーセが投げつけ、打ち砕いてしまいました。神さまはもう一度、それを作ってあげようとされます。
・前回はモーセが石の板を用意したという記述はありませんでしたが、今回はあらかじめ切り出して持ってきなさいと命じられます。前回のサイズも知っていたので、準備するのは難しくはなかったでしょう。
・そして 6～7 節の言葉を宣言しながら、神さまはモーセの前を通りすぎていかれました。「神さまは確かにそばにおられる」ということを、モーセはこのことによって知ったのでしょう。

（12 月　3 日）「出エジプト記 34：8～16」

わたしが、今日命じることを守りなさい。見よ、わたしはあなたの前から、アモリ人、カナン人、ヘト人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人を追い出す。

（出エジプト記 34 章 11 節）

・神さまは、モーセと契約を結びます。神さまは「わたしはあなたの民すべての前で驚くべき業を行う。それは全地のいかなる民にもいまだかつてなされたことのない業である」と告げます。
・さらに「あなたと共にいるこの民は皆、主の業を見るであろう。わたしがあなたと共にあって行うことは恐るべきものである」との言葉をモーセに語り、その直後に 11 節の言葉、「わたしはあなたの前から…を追い出す」という言葉を語られます。
・この言葉を文字通りに捉えると、非常に危険です。実際にこの言葉のせいで、多くの争いが引き起こされてきました。この「古い契約（旧約）」から「新しい契約（新約）」へと、わたしたちは目を向けなければいけないのです。

（12 月 28 日）「出エジプト記 40：1～16」

第一の月の一日に幕屋、つまり臨在の幕屋を建てなさい。

（出エジプト記 40 章 2 節）

・いよいよ出エジプト記も、最後の章に入りました。神さまはモーセに、幕屋を建てるように言われます。これは一から作るというのではなく、すでにモーセのところに運んでこられた幕屋を設置するという意味でしょう。
・神さまはその日を、第一の月の一日に設定されました。一年の最初の日、いわゆる「お正月」です。（実際はこの日は秋でしたが）。神さまはこの大事な新しい関係の幕開けを、一年のスタートに持ってこられました。
・この「毎日聖書」を読んでいる人も、もうすぐ新年を迎えます。自分自身を神さまのための幕屋として、備えてみてはどうでしょうか。神さまにすべてを用いていただけるよう、祈り求めてはいかがでしょうか。

（12 月 29 日）「出エジプト記 40：17～25」

次に、幕屋の上に天幕を広げ、更にその上に天幕の覆いを掛けた。主がモーセに命じられたとおりであった。

（出エジプト記 40 章 19 節）

・第二年というのは、モーセとイスラエルの人々がエジプトを出て二年目ということです。シナイに到着してから約 9 ヶ月が経った時期だと思われます。その新年の始まりに、幕屋が組み立てられました。
・イスラエルの人々は荒れ野を 40 年間さまよいますので、まだまだ序盤もいいところです。ですから「出エジプト記」は、エジプトを出て神さまから契約をいただいたということがメインテーマとなっているのです。
・本当であればこのまま「レビ記」「民数記」「申命記」「ヨシュア記」と読み進めて、イスラエルの人々がどのようにしてカナンの地に入ったのかを学びたいところですが、来年は一旦新約聖書に戻りたいと思います。（旧約が嫌というわけではありません。念のため）

（12 月 26 日）「出エジプト記 39：22～31」
鈴の次にざくろの飾り、鈴の次にざくろの飾りと、上着の裾の回りに付けた。これは、主がモーセに命じられたとおりに仕えるためであった。
（出エジプト記 39 章 26 節）

・続いて、エフォド用の長衣を青一色の織物で作ります。真っ青な長衣は、とても美しく目立ったことでしょう。その長衣の裾には、ざくろの飾りを付けます。一瞬「どくろ」に見えて、ドキッとしましたが。
・短衣やターバンなどは、アロンだけではなくその子らのためにも作られました。亜麻布に、一回一回「上質の」と注釈がつけられているのが、面白いなあと思います。さらに花模様の額当てを、純金で作ります。
・その額当てには、「主の聖なる者」と彫られています。牧師が首につけている白いカラーは、その人が神さまに属する者というしるしです。この額当てと、同じような考え方なのかもしれません。

（12 月 27 日）「出エジプト記 39：32～43」
モーセがそのすべての仕事を見たところ、彼らは主が命じられたとおり、そのとおり行っていたので、モーセは彼らを祝福した。
（出エジプト記 39 章 43 節）

・会見の幕屋の建設は、これで完了しました。現在奈良基督教会では牧師館の建設をおこなっていますが、早く完了しないか、待ち遠しいです。そしてこれまでも何度も強調されてきたように、「主がモーセに命じられたとおりに」、すべておこなわれてきました。
・モーセは神さまから聞いたことをイスラエルの人々に伝え、イスラエルの人々はそれを実行しました。モーセはずっとそばについていたわけではなく、最後にすべての仕事を見にきただけです。
・わたしだったら気になって、何度も足を運んでしまうかもしれません。しかしそれぞれの役割をそれぞれ任された人がおこなうことができれば、こんなに素晴らしいことはないでしょう。モーセはそんな彼らを祝福しました。

（12 月 4 日）「出エジプト記 34：17～20」
初めに胎を開くものはすべて、わたしのものである。あなたの家畜である牛や羊の初子が雄であるならば、すべて別にしなければならない。
（出エジプト記 34 章 19 節）

・教会の暦では、昨日降臨節第 1 主日を迎え、イエス様のご降誕を待ちわびる時期となりました。旧約の様々な決まりを見るたびに、イエス様がそれらを新しく更新してくださって本当によかったと思えます。
・最初に神さまは、「鋳物の神々を自分のために造るな」と命じられます。これは異教との区別をはっきりさせるために、命じられたことです。以前レジン液で十字架を作ったことがありますが、これはセーフでしょうか。
・また除酵祭についても書かれます。「主の過越」を記念しておこなわれるこの祭ですが、エジプトから急いで逃げるときにパンを膨らませる余裕がなかったことに由来します。聖餐式のウェハースがパサパサなのも、パン種を入れないからです。

（12 月 5 日）「出エジプト記 34：21～28」
モーセは主と共に四十日四十夜、そこにとどまった。彼はパンも食べず、水も飲まなかった。そして、十の戒めからなる契約の言葉を板に書き記した。
（出エジプト記 34 章 28 節）

・安息日や七週祭、そして年に三回、男子はみな神さまの前に出るということは、今でもユダヤ教の中で大切にされていることです。ただしイエス様の時代には、すでに年三回ではなく一回でもよいとされていましたが。
・神さまはモーセに、それらを含むたくさんの掟を示しました。その期間は、40 日 40 夜にもおよびました。40 という数字は、聖書によく登場します。イスラエルの民が荒れ野をさまよったのも 40 年、イエス様が荒れ野で誘惑を受けたのも 40 日 40 夜です。
・その間モーセは、パンも食べず水も飲まなかったそうです。これは飢えと戦ったということではなく、その期間は神さまによって養われたということです。そしてモーセは、自ら石の板に 10 の戒めを書きました。前回は神さまが書かれたのですが。

（12 月　6 日）「出エジプト記 34：29～35」

イスラエルの人々がモーセの顔を見ると、モーセの顔の肌は光を放っていた。モーセは、再び御前に行って主と語るまで顔に覆いを掛けた。

（出エジプト記 34 章 35 節）

・キリスト教美術を見ると、イエス様や聖人と呼ばれている人の頭から、光が放たれていることがよくあります。(いわゆる仏教の「後光」のようなものです)。モーセの顔からも、光が放たれていました。

・周りの人たちは、驚いたことでしょう。しかし神さまと 40 日 40 夜語り合っていたモーセです。それくらいのことはあっても不思議ではありません。ただこの光は、あまりにまぶしすぎたようです。

・そこでモーセは、普段は顔に覆いをするようにします。神さまと語るときは覆いを外しますが、人々の前では覆いをしたままにしておいたのです。この「顔の覆い」とは、一体何を暗示しているのでしょうか。

（12 月　7 日）「出エジプト記 35：1～3」

安息日には、あなたたちの住まいのどこででも火をたいてはならない。

（出エジプト記 35 章 3 節）

・ここからモーセは、十戒や掟をイスラエルの全会衆に伝えていきます。最初にモーセが伝えたのは、「安息日」の掟でした。モーセは言います。「その日に仕事をする者はすべて死ななければならない」と。

・神さまが天地創造のときに七日目に安息されたことを覚えるために、安息日は作られました。その日には奴隷も外国人も寄留者も家畜も、すべての労働から解き放たれる感謝の日だったはずです。

・しかしそれはすでに、「禁止」の掟へと変わってしまっています。火をたくことすら禁止された彼らにとって、安息日は喜びではなく苦痛の日になったのかもしれません。本当は神さまに感謝する特別な日なのですが。

（12 月 24 日）「出エジプト記 39：1～7」

彼らは主がモーセに命じられたとおり、青、紫、緋色の毛糸を使って、聖所で仕えるために織った衣服を作った。すなわち、アロンの祭服を作った。

（出エジプト記 39 章 1 節）

・幕屋建設が終わると、祭服、エフォド、肩ひもを作っていきます。「主がモーセに命じられたとおり」という言葉が、今日の箇所に二度出てきます。これがこれらの箇所の強調点なのでしょう。

・聖公会の礼拝でも、祭服（式服）を着て礼拝をおこないます。最初は非常に戸惑いましたが、ようやく慣れてきました。ただ式服を脱いだとたん、「牧師先生はどこいかれました？」と捜されたこともありますが。

・そしてカーネリアン（きれいな石です）にイスラエルの子らの名を彫ります。ここでいうイスラエルとはヤコブのことで、のちに 12 部族となるルベンやダンといった名前を彫るのです。これも神さまが命じたとおりでした。

（12 月 25 日）「出エジプト記 39：8～21」

次に、金、青、紫、緋色の毛糸、および亜麻のより糸を使って、エフォドと同じように、意匠家の描いた模様の胸当てを織った。

（出エジプト記 39 章 8 節）

・インターネットで「アロン　祭服」と調べると、この聖書の記述を再現した画像が見つかります。12 種類の宝石がはめ込まれた胸当ては、大きさが 1 ゼレト（約 22.5cm）の正方形です。

・大河ドラマなどで戦う人が付けている胸当ては、敵の攻撃を防御するためのものです。しかしここに出てくる胸当ては、防御が目的ではないようです。イスラエル民族を胸に刻むことが大切なのでしょう。

・イスラエル 12 部族を意味する 12 の宝石の重みは、それぞれの部族に属する人たちの重みです。アロンやその任を受け継ぐ人たちは、すべての人の思いを受け取りながら、様々な祭儀に臨んでいったのです。

（12 月 22 日）「出エジプト記 38：21～23」
以下、掟の幕屋である幕屋建設の記録は、モーセの命令により、祭司アロンの子イタマルの監督のもとに、レビ人が担当した。
（出エジプト記 38 章 21 節）

・イタマルは、アロンの四男です。6 章 23 節によれば、アロンにはナダブ、アビフ、エルアザル、イタマルという 4 人の息子がいました。しかしレビ記 10 章によると、ナダブとアビフは規定外の火を主の前に献げ、死んでしまいます。
・今日の記述との時系列は不明ですが、幕屋建設に関してはイタマルが指導者として活躍していたようです。ただ幕屋建設はかなり重要なことです。それを任されたということは、モーセの信頼も厚かったのでしょう。
・またベツァルエルとオホリアブの名前も書かれます。彼らがおこなったことは、神さまの目に正しいことだったのでしょう。しかし名前が載せられない多くの人の力があって幕屋建設が完了したことも、忘れてはならないと思います。

（12 月 23 日）「出エジプト記 38：24～31」
銀百キカルは聖所と垂れ幕の台座を鋳造するために使われ、台座一個につき銀一キカル、百個の台座に銀百キカルを必要とした。
（出エジプト記 38 章 27 節）

・このような数字を見ると、すべて現在の価値に変えたくなるのは、理数系の性なのでしょうか。金は全部で 29 キカル 730 シェケル使われました。これは約 1000kg、つまり 1 トンの金が使われたことになります。
・さらに銀は、100 キカル 1775 シェケル、つまり約 3440kg、およそ 3.5 トンです。そして青銅は、70 キカル 2400 シェケル、約 2321kg というとてつもない量が使われたことになります。
・神さまの臨在する場所は、それほどにも大切なところなのだということなのでしょう。イスラエルの民 60 万 3550 人が献げた銀は、このようにして用いられました。ただ今の教会がこのようなものを造ると、様々な批判を集めそうです。

（12 月　8 日）「出エジプト記 35：4～19」
あなたたちの持ち物のうちから、主のもとに献納物を持って来なさい。すべて進んで心からささげようとする者は、それを主への献納物として携えなさい。
（出エジプト記 35 章 5 節）

・モーセは 25 章で神さまから語られた言葉を、イスラエルの全会衆に伝えて行きます。わたしは 50 歳を過ぎた頃から、記憶力の低下に驚かされています。昔はすぐに記憶できたのですが、今は全くです。
・モーセの記憶力は、すごいものです。ただイスラエルの人たちは様々な掟を暗記していたので、もともと記憶力に長けた民族なのかもしれません。モーセはここで、献納物を携えてくるように、民に伝えます。
・教会共同体は本来このように、すべての人のささげ物で成り立っているものです。ささげる人と受け取る人がいるのではなく、みんなが出し合い、それを分かち合うのです。イスラエルの人たちも、「自分には何ができるのだろうか」と考えていたかもしれません。

（12 月　9 日）「出エジプト記 35：20～29」
心動かされ、進んで心からする者は皆、臨在の幕屋の仕事とすべての作業、および祭服などに用いるために、主への献納物を携えて来た。
（出エジプト記 35 章 21 節）

・「心を動かされた人」、「魂を突き動かされた人」という言葉が、新しい聖書には書かれています。モーセが伝えた神さまの言葉によって、それぞれの人が突き動かされたということです。
・ここに教会の原点があるような気がします。牧師の説教や様々な働きの中で、心動かされ、魂を突き動かされて物事をなすとき、そこには神さまに思いが溢れるのではないでしょうか。
・「自ら進んで」、「自発的に」、与えられたことを喜びのうちにおこなう。そのような教会になればと思います。「わたしの栄光ではなく神さまの栄光が御前に置かれます様に」と祈るばかりです。

（12 月 10 日）「出エジプト記 35：30～35」

知恵の心を満たして、すべての工芸に従事させ、彫刻師、意匠を考案する者、更に、青、紫、緋色の毛糸、亜麻糸を使ってつづれ織や縁取りをする者など、あらゆる種類の工芸に従事する者とし、意匠を考案する者とされた。

（出エジプト記 35 章 35 節）

・神さまは工芸をおこなうために、二人の人を指名します。手先の器用な人が立候補するのではなく、神さまが一方的に指名して、その人を神の霊で満たすのです。いわゆる「召命」といってよいでしょう。
・また彼らの心には、人を教える力も授けられています。神さまはイスラエルの民と契約を結ばれました。つまりモーセの代で、すべてが終わるわけではないのです。あらゆることに対して、後継者も必要となります。
・その人たちの心を知恵で満たし、さらに後継者を育てていく。その中で、様々な工芸品が作られていきます。しかし突然指名された二人は、ビックリしたのではないでしょうか。きっと恐れもあったと思います。

（12 月 11 日）「出エジプト記 36：1～7」

既にささげられた物は、作業全体を仕上げるのに十分で有り余るほどあった。

（出エジプト記 36 章 7 節）

・聖所をつくるための準備は、順調に進められていきます。このような場合、民が無理やり献品をするように強要されることがよくあります。しかしここでは、「自発的」におこなわれていたようです。
・しかもその「自発の献げ物」は、必要な量をはるかに超えていたそうです。つまり最初から各自に量が割り当てられていたのではなく、おのおのがささげたいと思った分をささげたということなのでしょう。それが結果的に、すごい量になったのです。
・教会でも、会堂建築や様々な補修などで、献金を呼びかけることがあります。そのときに、思いもしない良い結果が与えられることがあります。「神さまのために」ささげるとき、その根底に神さまの力が働くのかもしれません。

（12 月 20 日）「出エジプト記 38：1～8」

更に、青銅の洗盤と台を作ったが、それは臨在の幕屋の入り口で務めをする婦人たちの青銅の鏡で作った。（出エジプト記 38 章 8 節）

・焼き尽くすいけにえの祭壇は、昨日の香をたく祭壇よりも大きく、縦横 2m25cm、高さ 1m35cm となっています。牛も十分、乗せることができる大きさなのでしょう。現在の教会にある祭壇よりも、かなり大きなサイズになっています。
・この祭壇も、持ち運びができるように作られています。この大きさですから、かなりの重さでしょう。二本の棒で、四人で担ぐことになっていたようですが、きっと大変だったと思います。ただ中を空洞にするという工夫もされています。
・青銅の洗盤と脚を、「会見の幕屋の入り口で仕える女たち」の鏡で作ったという最後の一節は、何を意味しているのでしょうか。もうこれ以降、あなたたちは身だしなみをチェックする必要はないよ、ということなのでしょうか。

（12 月 21 日）「出エジプト記 38：9～20」

柱の台座は青銅、柱の鉤と桁は銀、柱頭は銀で覆われ、庭の柱はすべて銀の桁でつなぎ合わされていた。

（出エジプト記 38 章 17 節）

・次に、庭が造られます。その作業の中で使われているのは、青銅と銀です。当時はまだ、鉄は使われていなかったのでしょう。青銅の杭とはどのようなものなのか、興味もあります。
・庭までが造られたところで、幕屋建設の記録は終わります。モーセが命じられたことがそのまま実行されていることが、この記録からうかがえます。あえてこの記述を残した意味は、何なのでしょうか。
・それは後世に、「神さまからの指示をきちんと遂行した」ということを伝えたかったのだと思います。神さまに命じられたことをちゃんとやったから、神さまも自分たちに約束したことを守ってくれる、その信仰が根底にあるのです。

（12 月 18 日）「出エジプト記 37：17～24」
彼は純金で燭台を作った。燭台は、打ち出し作りとし、台座と支柱、萼と節と花弁が一体であった。
（出エジプト記 37 章 17 節）

・続いて純金で、燭台（メノラー）を作ります。結婚式場に行くと、大変豪華な燭台が使われていることがあります。でも多分、金メッキ。純金ではないと思います。（すいません、ひがみです）
・燭台と合わせて、七つの灯皿、芯切り鋏、火皿をすべて純金で作ります。その合計は 1 キカルだそうです。1 キカルは 34.2kg です。金の相場を調べてみると、1g あたり税込みで 10,719 円（12 月 5 日の情報）でした。
・ということは 1 キカルの純金は、現在の価値でなんと 3 億 6658 万 9800 円！金が豊富に産出していたのでしょうか。こういう計算をしてしまうところが、貧乏性だと言われる所以なのです。

（12 月 19 日）「出エジプト記 37：25～29」
彼はアカシヤ材で香をたく祭壇を造った。寸法は縦一アンマ、横一アンマの正方形に、高さ二アンマとした。そして、その四隅の角を祭壇から生えるように作った。（出エジプト記 37 章 25 節）

・次に、香をたくための祭壇を作ります。あとで焼き尽くすいけにえのための祭壇が出てきますので、これらは別々に作られていたようです。1 アンマは約 45cm ですので、この台は 45cm 四方で高さが 90cm。思ったよりも小さいものです。
・腰の高さくらいの花瓶台のようなイメージでしょうか。しかし上面と側面と角は金で覆われており、また金の縁飾りもつけられています。とにかくきらびやかなつくりになっています。
・この祭壇は、持ち運びができるように棒を通すところが作られました。さらに棒も作られます。持ち運ぶことを想定して作られているのですが、イスラエルの人たちが「放浪の民」となっていくことを暗示しているのかもしれません。

（12 月 12 日）「出エジプト記 36：8～13」
仕事に従事する者のうち、心に知恵のある者はすべて、幕屋に用いる十枚の幕を織った。すなわち、亜麻のより糸、青、紫、緋色の毛糸を使って意匠家の描いたケルビムの模様を織り上げた。
（出エジプト記 36 章 8 節）

・幕屋とは神さまを礼拝する場所で、「宿り場」とも訳されます。神さまがそこに宿ってくださるという意味でしょうか。すでに神さまが指示された通りの材料と寸法と手順で、心に知恵のある人たちが作っていきます。
・幕を張ることでできた部屋のような場所で、いつも神さまを礼拝できるようにしたのでしょう。ただ荒れ野を移動していた彼らには、木造建築のような幕屋は作ることができませんでした。
・奈良基督教会は、「宮大工」の方の設計によって建てられました。普段はお宮さんなどを手掛けておられたそうですが、教会建築のためにたくさんの知恵を用いられました。神さまがそのようにご計画なさったのでしょう。

（12 月 13 日）「出エジプト記 36：14～19」
次に、山羊の毛を使って十一枚の幕を作り、幕屋を覆う天幕とした。
（出エジプト記 36 章 14 節）

・天幕とは、幕屋を覆うテントのようなものです。キャンプなどで使う「タープ」を想像すると、一番近いのかもしれません。（あまりキャンプに興味のない方には、分かりにくいたとえですいません。）
・親愛幼稚園の園舎保育室には、天蓋（てんがい）が掛けられています。その空間は、子どもたちにも安らぎを与えるようです。赤ちゃんのベッドの周りを白い布で覆うのと、同じなのかもしれません。
・イエス様の時代にも、幕屋や天幕は作られていたようです。パウロは「テント造り」を職業としていました。ただパウロが造る幕屋は後から出てくる「贖いの座」などを入れるようなものではなかったと思います。

（12 月 14 日）「出エジプト記 36：20～34」

それぞれの壁板に二つの柄を作って隣の壁板とつなぎ合わせた。幕屋の壁板全部に同じものを作った。

（出エジプト記 36 章 22 節）

・幕屋の壁板は、アカシヤ材で作られます。アカシヤ材は今もフローリングなどで使われている木材です。そのメリットを調べてみると、落ち着いた色合いで、耐久性・加工性に優れているとありました。
・また伸縮が少なく安定しているので、人が頻繁に踏む場所にも適しているそうです。ただしイスラエルの幕屋は、それほど人が出入りしなかったと思いますが。またアカシヤは成長が早いため、コストもお手頃だそうです。
・一方デメリットですが、熱が逃げやすく、表面が冷たくなりがちだそうです。ユダヤはとても暑い地域ですので、これはかえって良いことかもしれません。神さまは彼らに、最も適した木材を指定されたということでしょう。

（12 月 15 日）「出エジプト記 36：35～38」

金箔で覆ったアカシヤ材の四本の柱の金の鉤に掛けた。柱のために四つの銀の台座を鋳造した。

（出エジプト記 36 章 36 節）

・さらに垂れ幕の中に、ケルビムを織り出します。ケルビムはアダムとエバが神さまとの約束を破って楽園を追い出されたときに、エデンの園の東に炎の剣と共に神さまが置かれた天使です。
・この天使ケルビムは神さまの姿を見ることができる（智・ソフィア）ため、「智天使」とも呼ばれます。ただその姿はエゼキエル書 10 章 21 節によれば、4 つの顔と 4 つの翼を持ち、その翼の下には人の手のようなものがあると書かれます。
・契約の箱の上にもケルビムの金細工が乗せられましたが、この刺しゅうや金細工はどのような形で描かれたのでしょうか。翼をもった動物のような形なのか、それとも顔と翼が 4 つずつあるのか。どうなのでしょう。

（12 月 16 日）「出エジプト記 37：1～9」

一対のケルビムは向かい合い、顔を贖いの座に向け、翼を広げてこれを覆った。

（出エジプト記 37 章 9 節）

・続いて箱と贖いの座を作ります。「ベツァルエルはアカシヤ材で箱を作った」とここだけは、誰が作ったかがはっきり書かれています。この「箱を作る」という作業は、特別なものなのでしょう。
・箱は内側も外側も、純金で覆われました。また贖いの座も、純金で造られます。確かに豪華なのですが、福音書にあるイエス様の行動を読むと、どうしても違和感を覚えてしまいます。
・幸福の王子の物語や、アシジのフランシスコのおこなったことと、どうしても比較してしまいます。ただ批判だけを繰り返すと、高価な香油をイエス様に注いだ女性を批判したユダと、同じ場所に立ってしまうようにも思えてしまいます。

（12 月 17 日）「出エジプト記 37：10～16」

また、机で用いる祭具を作り、ぶどう酒の献げ物をささげるのに用いる皿、柄杓、水差し、小瓶を純金で作った。

（出エジプト記 37 章 16 節）

・ここで作られる台の上には、供えのパンが置かれます。わたしの実家には仏壇と神棚があり、毎朝父がそこにご飯をお供えしていました。夕方にはそれを引き上げるのですが、その頃にはご飯はカピカピになっていました。
・ここで供えられるパンは、常に絶やしてはいけないと命じられていました。ですから新しいパンが焼けると、古いものと交換をしていたようです。そして古いパンは、祭司だけが食べていたようです。
・サムエル記上 21 章 4～7 節には、その聖別された、供えられていたパンをダビデが食べたという記述があります。ダビデはそのころサウル王から逃げていましたが、そのパンによって命を長らえることができました。